

## 社會と兒童（續）

（フレーベル會二月例會に於ける講演）

文學士 小林 照 朗

今日物質的文明の世の中では、物質的勢力が大に  
 瀾登致しまして、動もすると兒童にも煩を及ぼす  
 のであります。彼の菅原の芝居の如き、主公の  
 身代りに自分の子供を犠牲にするやうなこともあ  
 りまして、如何に子供が社會に活動して居るか  
 いふことを證據立てると思ふのであります。  
 子寶といふ言葉は日本に於ては昔から唱へられた  
 言葉でありまして、日本では子供を持つといふこ  
 とは非常に結構なことであるとして喜ばれたので  
 あります。前に申しましたやうに、子供は二人で  
 よいと三人以上生むはどうとか、餘り澤山の子  
 供を生むと親が養はれるとか、多く子供を養ふと自  
 分の化粧料に影響を及ぼすといふやうな、西洋人  
 とは大に趣を異にした所がありまして、實際こ

れは日本の家族制度の非常に立派な所、非常に喜  
 ばしい所でありまして、日本の家庭が斯ういふやう  
 な方面に影響を受けて居ることは實に大なるもの  
 であると思ふのであります。尙ほ子供が社會に與  
 ふる影響に就て、殊に有力なる點は次に私が御話  
 しやうと思ふ所にあるのであります。

それは何かといふに子供は夫婦の權であるとい  
 ふことです、或は夫婦の繋ぎであるといふのです  
 社會問題として、動もすると、離婚問題が起るの  
 であります、此離婚の統計は各國とも随分其數が  
 多いのであります、日本でも調査の行届きまし  
 た所は多少分りますが、離婚の數は随分あるの  
 であります、若し子供といふものが無かりせば恐ら  
 く離婚の數は今日に幾層倍するであらうと考へら  
 れるのであります。此點に於きましては子供とい  
 ふものは實に「ファミリー」の根本を形造るもの  
 と私は思ふ。子供は夫婦の楔である、夫婦の繋ぎ  
 であるといふやうな事を今更申すのではありませ

ぬ、近世教育の發達の上に其初を形造つた所の彼の有名なる佛蘭西のルーソーは早くも、夫婦といふものゝ間に、是非子供はなくてはならぬものである、子供は夫婦の楔であるといふことを「エミール」といふ書物の中に既に論じて居るのであります。實に子供は愛の源であつて、子供が居れば喧嘩もまるく治まるといふやうなことは随分社會に於て現はれることで、これ又子供といふものが如何に社會に影響を及ぼすかといふ事を證明するものである。日本では「負ふた子に教へられて淺瀬を渡る」といふ言葉がありますが、自分が背負して大きくした子供に教へられて淺瀬を渡るといふことは、單にそれだけの意味ではなく、今日の如く教育が普及して學校等の設備が、非常に完全になつた時代では、随分我々は世間に於て見聞するのでございます。殊に子供が新教育を受けて居るといふことは、新たに興つた社會に於て殊に多くそれを見るであらうと私は考へる。これに就て

私は一つ見聞談を致したのであります。私は去年の夏北海道の方に旅行いたしました。北海道といふ所は色々の意味に於て非常に面白い結果を我々に與へるのであります。私は北海道を観察して感じた要點を丁度其頃歐米各國を廻つて歸た人に話しました所が、其人が私の北海道に就て感じたことはスツカリ其儘米國に移してよい、今日亞米利加は丁度北海道に行つた通りであるといふやうなことを云つて居りましたが、其北海道を見た中に私が感じた事の中に此負ふた子に教へられて淺瀬を渡るといふやうな事を度々見聞して來たのであります。それはどうかと申しますれば斯の如き新社會では、即ち移住した人が多く住んで居るやうな新興の社會に於きましては、教育が非常に熱心に唱へられるといふことです。即ち北海道といふ所は非常に教育に金を惜まない所で、學校の建物などは随分立派な設備が出来て居る。これ程立派な設備が出来て居りますが、然らば北

海道の人は教育があるかと云へばそれは反對で、反對な點から教育を重んずる、自分が明盲目であるから、自分が教育を受けなかつたから、却つて教育といふことに金を投ずる。詰り熱心にそれを希望するといふのでありますが、其所で此子供が如何にさういふ社會に影響を與ふかと見ると、前にも話した通り學校教育を受けた者は二十以下の若者に多く、二十以上の人の中には、所謂移住者で、腕一本で此地に來たやうな者が多く、世間的の經驗には富んで居りまして、風教に及ぼす上から云へば大に寒心すべき事が少くない、それが負ふた子に教へられて、學校歸りの子供などが随分親を羨ける。御存じの通り移住者の多い北海道などでは、男が單身移住したものも多くして、女は少いのであります。従つて風教問題にも非難すべき點がナカ／＼ある。女の方でも、随分方々の男と關係して暴れ廻つた揚句、今日では立派な家を造つて居るといふやうな者も多く見受けるので

あります。さういふやうな者は申すまでもなく、教育などは受けて居りませぬ。所謂人の母として風教の點に於て寒心すべき事は澤山ある。即ち家庭教育の大事であるといふことは學校教師などは充分云ふことでありますけれども、斯んな風でありますから北海道の家庭教育に非常に困る。自分の娘を高等女學校に入れて居るに拘はらず、學校から歸つて來ると、随分親の不躱な言葉を聞かせる。子供は直ぐ「御母さんそんな馬鹿な事いふものではないませぬ」とやり込める。他所の家に行つても子供が居ると話しを遠慮しなければならぬといふやうな有様である。

もう一つこれは中學生徒の例であります、親が不品行をした習慣がナカ／＼止まないので、云ふも穢らはしいやうな所に遊びに行く、所がお母さんも矢張り教育などはないから家に居つて色んな事を云つて立腹して居る、其結果どうするかといふと、最後中學校に行つて居る子供を呼びにやる。

中學の五年位の子供をば、父の遊んで居る場所にやる、子供は使に行くと、父は誰れが使に來たと聞く、貴方のお坊さんだといふと長男が來たのかどうか通して呉れ、人間といふものは酒を飲まなければならぬ、中學校の五年級にもなつたのだから酒を飲む位は教へて置かなければならぬといふやうな調子で、中學校で家庭教育のことを如何にやかましく云つて見ても甲斐がないと、斯ういふ事を云つて居りましたが、新興の社會に於きましては、今の負ふた子に教へられが其儘現はれて居ります。子供が却つて改良感化に當るといふのです。教育といふことを本統にやるには、どうしても新興の社會に於ては子供に望みを屬するやうになるのであります。これが社會に立つ時代を俟たなければ殆んど教育の効果なるものはないやうな感じを興へるのであります。北海道のやうな所では子供が社會に及ぼす影響は随分大なるものがあるのであります。

昔は子供といふものは總て親の子供といふことに思つて居つた、西洋に於きましても希臘羅馬の時代、又基督教の出た猶太などに於きましても矢張り斯ういふ思想が行はれたものであつて、即ち子供は親の物である。子供を活さうと殺さうと親の勝手である。従つて彼の鞭撻といふことは、猶太希臘、羅馬等にはナカク、盛んに行はれたものであります。たしか聖書の中にも「鞭を加へざるものは其子を憎むなり。子を愛するものは連りに之を戒む」とかいふ句があつたと思ひます。それからみれば今日は全く反對で、子供といふものは社會の公産物として取扱つて行かなければならぬやうな反對の思想を有つて來ました。今日では學校の教師が兒童を鞭つやうなことは禁せられて居るのであります。さういふやうなことがなくても、多少これに類したことを田舎の小學校などでやりますと、父兄が承知しない傾向を生じて随分問題が起つて來るのであります。これ等に對

しても社會と子供との關係は大に研究しなければならぬ問題でありまして、成程子供といふものは社會の産物でありますと、同時に又家庭の産物といふことも忘られないのであります。さういふ方面に就て、是から少しく論じて見たいと思ふのであります。

それに先達つて、尙ほ申したいと思ひますのは、子供が我々大人に影響を與へるといふこと、それは何かと申しますと、世の中の人は能く云ふのであります、子供がなければモット仕事が出来やうとか、學者の方で云へばモット勉強が出来やう、どうも子供が邪魔をして困るといふのであります、が、私はこれに對して反對の考を有つて居る。世の中は實際は此子供のある爲に、自分の仕事に熱心従事するといふことが出来るのであつて、世の中の人が色々な方面に活動するのは大に子供に鞭撻されることが多いだらうと思ふのであります、實際に子供を養はなければならぬ、子供を教育し

て行かなければならぬ、其必要上仕事を。働くといふことは今日一般の社會に於て其事例を多く見る所であらうと思ひます、人間が家庭に於て子供といふ繁累がなく、勤勞しなくても暮らして行けるといふことになつたらば、それでも尙ほ勤勞するか、學者ならば大に勉強するか、勞働者ならば大に勞働するか、これは考へ物であらうと思ふ。

或西洋の書物を読んで見ました所が書いて居る學者はボサンケーといふ人で、家族論の中に書いて居る中に、或る所を通つた所が妻君が臺所で忙がはしげに働いて居つた、ところが子供が付廻つて頸に手をやつたり或は背中に廻つたりして居る中で、女は一生懸命に働いて居つた。それを見て誠に氣の毒に思つて同情の念に堪へなかつた。そこで貴嬢そんなに子供に邪魔されては其爲に随分手間が取れませうと云つた所が、其婦人は怒るやうな態度で、どうしてさういふ事を仰しやる。子供

が斯の如くして呉れるので働けるのである、子供がなかつたならば何を樂しみに働かせようと云ふたので其人は之を聞いて、子供といふものが家庭に於て重要な意味をなすものであると感じたと書いてありますが、實に其通りであらうと思ひます、子供がなかつたならば夫婦といふものは所謂苦痛たるに過ぎない、社會も子供があるが爲に大に趣を増して、色々の仕事も出来るであらうと思ふ。でありますから、佛蘭西の二覺制度といふか如きは根本的に間違つて居るといふことが、學究的に研究しなくても充分我々は知ることが出来ると思ひます、所が斯の如く子供は家庭に於て重要なに係はらず、先に云ひました如く、近世文明の結果、經濟の苦しい結果隨分場合に依ては子供を邪魔物視するといふのが多いのであります。

一月二十五日の倫敦タイムス電報が日本の新聞に載つて居りました中に斯ういふのがある。佛蘭西の出産率は減少して、佛蘭西では殖民地の軍隊は

新たに土人を以て組織するといふことがありました、丁度先月の二十五日は今から二週間前て其タイムス電報に載つて居るのであります。斯ういふことは單に外國電報だとしてはそれまでいあるが斯ういふ短かい電報でも我々には非常に無限の感慨を與へるのであります、佛蘭西では今尙ほ此出生率の減少が、千九百十一年の今日尙ほ悪影響を現はして、今までは佛蘭西人に依つて組織せられた軍隊までも、土人に依つて組織せねばならぬやうな形勢を生じて來たかといふことは我々は想像するのであります。同時に我日本に於ても將來斯の如き形勢に陥らないやうにやつて貰ひたいと感じが致すのであります。此佛蘭西の人口の停滞又は減少は非常に識者の憂ふる所でありまして、今日に始つたものではありませぬ、何時か佛蘭西の議會問題に提供せられたこともありまして、斯く人口減少の原因は果して何處にあるかといふやうな事に就て論じて居る學者も見受けるのであります

或は小説家の如きは小説に仕組んで、子供を生むことを避けるやうな母は眞の母でないといふやうなことを論じて居るやうであります。其結果何人以上子供が出来たならば國家へ取つて養ふとか、それに勳章を與へやうとか云つて居る人もあるやうであります。

工場法といふものも、是又子供に對する保護であつて、餘り多くの荷物を背負してはならぬとか、餘り長く働かせてはいかぬとか、色々の方面から論じて居るのであります。

單に生れた子供を保護するだけでは本統の子供の保護といふことでない、生れた子供を保護するのみならず生れない子供を保護して立派に生ませる若くは家庭に於て餘計子供を生むやうに考へる必要があると思ふ。

日本は近來朝鮮を併せて、或は滿州に殖民すると其他の殖民を圖ることでありまして、諸君の御承知の通り大學には殖民學の講座が置かれるやう

になりましたが、通常殖民といふと移殖、移らせるといふことでなければならぬやうであります。が、私は學問的研究よりすればどうしても殖民といふ事の中には、生むといふことを含まなければならぬ、廣義に解すれば二様の殖民があつて、始めて殖民といふことが完全して來ると思ひます。

如何なる社會が健全であるかといふに、社會學は斯ういふことを吾人に教へるのであります。人口が生れてから、二歳三歳四歳十歳二十歳、或は三十歳四十歳六十歳と云ふやうに上に伸びて來る。其統計を取つて見ると或は十歳以下十歳以上二十歳以下二十歳以上、三十歳、五十歳と分けて統計を取つて見る。さうすると六十より五十、五十より四十と段々歳の小さくなる程、數が多くなる、丁度正三角形のやうになる、斯の如き社會は誠に健全な社會であつて旺盛な證據であります。日本の人口の統計は丁度斯ういふやうになります。と

ところが不健全なる社會は、それが反對で、鐘形になる。五歳以下より二十歳前後の處が多いとかいふ風で鐘形になる。如斯不健全な社會は、將來人口の點に於て減じすべき社會である、學校にしてもさうである。一年から六年まである小學校を經營するとして一年の入學者が、三年四年より少いやうな状態を現はして來ると其學校經營は有望といふことは云へない、昨年あたりの入學期に、東京市内の高等女學校に於て、入學希望者が少かつたと云つて一時悲觀に赴いたことがある。入學する生徒數が卒業する生徒數より少いやうでは、其學校の經營は健全に發達しやうとは思はれない社會も之と同じ關係で、子供の出生が少いやうな社會は寔に不健全な社會と云はねばならぬと思ふのであります。皆様方におきましても、單に他人の子供を教育するといふだけに止まらず、家庭に於て自分の御子供達を御育てになり、其經驗も交へて人の子を保育せらるゝなれば所謂兒童保育

者といふ意味が、更に重要なる意味を加はへ、又更に興味を増すであらうと思ふのであります。子供が有ると却つて邪魔になる、殊に教師なんかは出來ないといふやうな話を聴くのであります。それは間違ひであつて、眞の女のやうに子供に興味をもつて、行つたならば、子供があれば教員は出來ないといふことではないと思ふのであります。詰り外國に於ても、幼稚園とか小學校の事に關して、父兄側から色々の非難があるのであります。が、此事に就て御參考までに申上げやうと思ひます、随分これに類したことは我國にもあるのであります。さきに申しましたボサントンの書物に家庭と子供との關係を論じて居ります。其中の始めに斯ういふ事を云つて居る。子供といふものは古今變遷がない。今日の時代も昔の時代も、時代としては大に變つて居るけれども、子供といふ事には變つて居るけれども、若し變りがありもすれば昔では往々子供を殺した例もあるが、今日



では籠へて行はれない、この一事が變つた丈のものである。といふて居ります。我々が日々教育史を調べて居りましたも、詰り教育史の中に、その事が出て来るのであります、希臘では胎動五ヶ月以下のものは殺すのも自由であるとか書いてあります、日本などでも、子をまびくといふことは徳太子が人民に教へられたことであるなど出て居る。高知縣あたりでは随分此例があるやうで、統計の上には現はれて居ります。それは、都會の人口といふものは大抵土地によつて、どれ位あり又どれ位殖えるといふことは分つて居るのであります。年々殖えて行くべき筈であるのに、夫れが殖えないといふ状態を示して居るやうならば、其都會は多少其間に「ダーク」の方面がある、それを調査して見ますと、随分色々の事が出て来るのであります。随分古今に亘つてさういふ事もあるものであります。

又右の書物に子供を論じて参りまして、子供は無

事無なるものである。我々は鳥を見ても分る、鳥か糞にしても黄ろい噴を出して餌を咬へるのを見ると可哀相だといふ感じが起る。子供も丁度それと同じで、子供に物をねだられて腹を立てるものはない、子供の物をねだるのは何等の心なく實に無邪氣である。自然同情を濫ぐやうになるものであります、其飾りない心を愛することを論じまして、それから漸々子供と家庭の關係を論じて居るのであります、其中に子供は幼稚園なんかで育てるより家庭に於て育てる方がよい、家庭に於て育てば個人性を起す、此點に於ては子供は家庭に置く方がよいといふのです、これは直ぐ私共は賛成は出来ませんが、唯だ斯う云つて居るといふことを幼稚園なり小學校で子供を預つて居る人は参考にするべきことであらうと思ふ、勿論、多少の弊害は出て来るものでありますから、弊害を取除けることは必得なければならぬと思ふのであります、更に

進んで云つて居りますのは、近來學校を家庭の代用とせんとする傾向が非常に多い、で近來西洋では將來學校は子供の世界である。即ち子供は學校で働き學校で遊ぶ、何から何まで學校でやるといふのであります。貴族であれば幼年から寄宿する學校に入れる、貧民であれば通常の學校に入れる一切學校で子供を育て、費ふといふことを論じて居るものもあります。學校を家庭の代用にせんとする傾向のあるといふことを論じて居りますが、これは又大に參考になる事であらうと思ふのであります。それは子供を學校で育てるのは宜いか悪いかは問題であつて、子供を學校のみで育てるといふのも極端でありますし、又家庭のみで育てるといふことも亦極端でありまして、其中間を執るのが最も宜からうと思ひます。中間を執るとすれば半ばは學校に居り、半ばは家庭に居るといふことにしなければならぬと思ふのであります。學校のみが教育の場所でない家庭に於ても極めて重要

であることに就てさういふ方面に就て、論じて居りますが、參考にならうと思ひますから、それを少しく述べやうと思ひます。それは學校と家庭といふ事を云つて居る。第一に家庭といふものは子供の現在の爲にあるものであつて、家庭といふものは子供の將來の爲にあるものである。即ち家庭に於ては子供を早く大きくしてさうして有用な材にしてどうするといふよりも親が自分の樂しみの爲に育てるといふ感じがある六つ七つは無邪氣なもので何時までも此儘で居つて欲しいやうな感じがする。十九二十にもなると親にも逆つたりして、腕白子僧の時の方がよいやうな感じがする。然るに學校はさうでない、學校に居る間の年数は限られ居るし、學校のさせる事も定まつて居つて、或る思想の爲に一々目的を持つて教へて居る、學校と家庭とは此點に於ても霄壤天地の差がある。それから次には家庭に於ては相助けるといふ思想が發達する、子供は親のする

ことを真似て直く直似をする、御馳走でも拵へれば直く自分もやるといふ風で、例へば鯉節なら鯉節を出來ないながらに自分がかく又年取つた人が何か高い所から取らうとすれば自分も真似をする斯ういふ譯で、互に相助けるといふ事が、家庭では自然に行はれる。學校では斯う云ふ風な相助けるといふことは出來ない、其次に家庭は永久的である。即ち家庭に於ては、大きくなつてお父さんになつても矢張り家庭に居る、學校は一時的であつて偶々學校を出た人が教員でもすれば其學校に行くこともあるが、大抵は自分の出た學校へ戻つて來ることは少い、其次には家庭に於てはどんな家でも、自分の子供を他所の子供と同じと思ふ子供と思ふものはない、自分の家の子供は特別である、特別であるといふのみならず、他人から、どうも普通の子供のやうなと云はるれば喜ばない、何所か違つた所があつて欲しい、變つた所があると云はるれば喜ぶ、何故喜ぶかそれは、遺傳から

來るのであらうと思ふ。殊に自分に幾分か似て居ると云はれ、ば喜ぶといふやうなものである。それは物質的の方面からのみでなく精神的の氣風とかの方を大に希望して居る。ところが學校ではさうでない、學校では個性を顧みるといふことは云ふまでもないことであるけれども個性的の訓練は出來易いといふより出來難いといふ方が、學校本來の持前である。何故であるかと云へば、一般の子供の母として共同に取扱ふのであるから、各々の特長に従つてやるのは困難である。併ながら茲に學校は子供を、或は「クラス」なら「クラス」全體の爲に、或る特別の困難に打勝つといふ精神を與へる事が出来る、これは學校の利益でありまして、これは學校の利益として考へなければならぬ、家庭では我儘が出来るが學校では多少遠慮しなければならぬといふことになる。

それから近來、軟かい消化し易いものを食はせやうといふ傾向がある、これは大に考ふべきことで

ある。亞米利加では此頃朝飯を非常に消化し易いやうに製造して專賣特許を得たものがある。食ふた物を直ぐ消化しやうとして居る。今日の學校教育の傾向は斯ういふ傾向がある。無暗に學科を容易しやうとするのは、それであると斯う論じて居る。これはまあ近來日本でも多少斯ういふ意見を持つ人もあるやうであります。これ等のことは極端に云へば昔の學校の風になつて仕舞つてよいこととは申すまでもないことでありませうが、一の時弊を救済する爲めに稍や誇張して云つても居りませうが學校の教育に携はる者には又參考にならうと思ひます。

日本の教育家として最も實業教育に非常な趣味を有つて居られた、貝原益軒先生は、困難して難儀するのは將來の困難を無くする爲であるといふやうに云つて居られますが、それが今の學校に於ては忘れられたといふではないのでありますけれども、これ等のことが今日の學校に薄らいで來たと

いふのは事實であらうと思ふのであります。此學校で教へることが近來易くなつたといふことは、これは社會全體に就て重要なことであると思ふけるのであります。例へば昔ならば足で歩かなければならぬのが、今日は人力車、電車、汽車等が出來て、非常に交通が便利になつた結果として歩かなくても済む、であるからして儘かロビンソンといふ人だと思ひますが、將來の文明を呪咀した人もある。此關子で進んで行つたならば、將來の文明はどうなるか、斯ういふやうに人々が消化の容易なことののみを好んで行は、將來人々の齒はいけなくなつてしまふ。さうすると自然齒の必要はなくなつて、遂には齒は無くなつてしまふ、近來人間の齒が次第に悪くなるが、矢張り其傾向である。頭でも帽子を被つて、保護するから、將來は段々禿頭になりて、頭を保護する髪はなくなるといふのです。それから足でもさうである。自分の足で歩かなくても、交通機關が發達して、自働

車とか何とか、足を勢しないで行く結果、段々足が利かなくなるのは當然である。將來人間の足などはなくなつてしまふ、それで他の方面が非常に發達する。例へば頭は益々使はれるから將來の人間の頭はドシ／＼大きくなる。之は「サイエンス」から見た自然の理窟であつて、齒がなくなり、足がなくなり、頭ばかり大きい人間が出来る、斯ういふやうに論じて居ります。併し之も頭から全然その通りであるといふことは出来ない、今日の進化論の所謂、用不用の法則、其點から云へばさうも云はれるかも知れまいが、私は唯だ皆さんの御參考次に述べて置くのであります。或は人間には尾もある、今は殆んどないけれども、解剖學者に云はせれば尾のあつた時代があつた證據には今日我々に尾骨がある、又男の乳も必要のあつた時代は大きくあつたが段々必要がなくなるに従つて今のやうに小さくなつて仕舞つた、といふやうに云ふのであります。今日の文明を呪咀するといふの

はこれである、將來の文明が、一體どういふことになるであらうかといふことは、大なる問題であります。が兒童と社會の方面とは違ふ問題であります。から今日は申しませぬ、尙ほさきの「ボサンケ」は家庭が學校に對する不平を述べて居るのであります。家庭が學校に對する不平といふと、一體老人といふものは何時も若い者に對して不平を云ふものであつて、どうしても子供と老人とは思ふが違ふ、學校に子供を入れて、さうして學校の講義を聴いて歸つて、家庭に這入るとどうも學校で聞ひた通りに行かぬやうなこともある。其非難の一つは長者に對する禮を知らぬといふのであります、何故に長者に對する禮を缺くか、若い者と老人との間には多少さういふ傾もありませうが、斯ういふことを云つて居る。子供が親とか長者に對しての敬禮の仕方を知らない、と云つて昔のやうに厭迫して敬禮でも何んでもさせるといふ譯には行かない、これは昔では智識の源は皆父母であ

つて何でも親に聞けば知つて居る。學校などは無論ありませぬ、日本では寺小屋位であります、親は何んでも知つて居たところが、近來は學校が出来てから、智識の源泉は親でなくなつた、學校の先生に聞けば何んでも知つて居るが、親は知らないことが多い。そこで親はそれ程偉い者でないといふことが子供の頭に沁み込んで居る。これは一方から云へば教育のある結果であります、此結果子供が親に向つての尊敬の程度が衰へるといふことになる、これは學校の教育に従事する者は注意しなければならぬことであるが、親の方でも注意する必要があります。子供より年長だといふだけでは子供を教へるといふ譯には行かぬ、そこで親の方でも多少書物を勉強する必要があります、子供に負けない位に勉強する必要があります。斯う云つて居るこれは誠に参考にならうと思ひます。

要するに子供の教育に従事するとか、兒童の保護に従事するものは、社會と子供とに關して、社會

の單位は家庭でありますから、どうしても家庭といふものに就て充分それを依達しなければならぬ充分家庭といふものの研究をして貰いたいと思ふのであります。或はこれが爲に家庭學といふやうな學問も起りませうが、今日は唯だ社會學の一部として家庭を研究して居るのであります、家庭の研究はどうしても貴方には多少心掛けて貰いたいといふ考を有つて居るのであります。況んや家庭といふものは社會の根本であつて、大學に入れて三年學ぶことも家庭に於て三年學ぶ方が、其品性の上には大事であるといふ論者もある位でありますから家庭の研究は今後益々歩を進めたいと思ひます。纏らない話を長く申上げましたが、兒童問題に關する色々の詳しいことは他日に譲りまして今日はこれで終ります。(速記)

誠は天の道なり  
之を誠にするは人の道なり。

(中 應)